

献 辞

大学社会にも定年制がある限り、誰もが人生の転換を迎える。本年度はかねて私淑する橋口幸夫教授の退官記念号に、書き難い献辞の筆を取ることになった。

橋口先生の名前で反射的に浮かぶのは、1974年以来20年間にわたる鹿児島地方最低賃金審議委員として、特にここ10年近く会長としての重責を担って来られた事である。この他にも最近は鹿児島機会均等調停委員会委員なども兼ねて、地域の産業、労働界の発展に尽力してこられた。これが県立短大の知名度を高めることにつながっている事は言うまでもない。

学内に場を移すと、1968年ご赴任以来、殊に教授ご昇任と共に、教育・研究へのご努力だけでなく、多くの学内役職を歴任されたが3期6年勤められた図書館長の任務に、情熱を注がれたことを明記しておきたい。3期目に当たって長年懸案であった図書館増築と、それに伴う視聴覚教室充実などを果たされ、さらに業務へのコンピュータ導入の端緒を開かれた事は、本学にとって画期的であり、先生も本望を遂げられたと言えよう。

先生の教育・研究の側面は商経科の学科長に語って頂くのが妥当だが、私の個人的な追憶を許して頂くと、地元各大学の研究者を中心に20余名が分担した「鹿児島の経済と社会」1980年、地方自治研究所刊がある。先生が執筆された工業の現状と展望を、同じ分担者の一人として強い関心を持ち、初めて面識を得たのを記憶している。この論文の延長に在って先生のライフ・ワークに関わるのが「日本資本主義における国家と資本」(1)－(5)および(完)の20年にわたる連載論文であろう。門外漢の私にも、戦後経済政策の思想史とも言える先生の深い思索がたどれるご労作である。

豊かな社会経験と研究業績を、茫然たる風貌に包んだ人格に触れて来た本学の学生、同僚は幸いであった。今後も先生が新しい舞台を展開されることを期待し、ご清祥を祈るものである。

鹿児島県立短期大学長 岩切 成郎